

全国大学書道学会 第65回 令和5年度（東京）大会 開催要項（第2次案内）

下記の要領で、全国大学書道学会 令和5年度（東京）大会を開催します。ふるってご参加いただきたく、ご案内申し上げます。

本会は本年度、創立65周年を迎えました。大会ではこれを記念し、海外から著名な研究者を招聘し、特別講演を開催いたします。

- 1) 主催 全国大学書道学会
- 2) 開催大学 跡見学園女子大学
- 3) 開催日 令和5（2023）年9月17日（日）
- 4) 大会会場 跡見学園女子大学 文京キャンパス 〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2
- 5) 参加費 3,000円 * 準会員（大学院生）は2,000円

6) 参加申込

下記フォームより9月9日（土）12：00までに事前申し込みをお願いします。
所属と氏名を書いた名札を名札ケース（各自ご用意ください）に入れてお持ちください。

[大会参加登録用 Google フォーム]

<https://forms.gle/enbYetBnHT1Pa44bA>

必ず事前のお申し込みをお願いいたします。9月9日（土）12：00まで



※入力された情報は本大会の運営にのみ使用いたします。

※フォームのお申込みが難しい場合、開催大学までメールもしくはFAX・はがきにて次の情報をお送りください。

・参加ご希望の旨、ご氏名、ご所属、参加学会名、メールアドレス、連絡がとれる電話番号。

こちらのQRコード
からも読み取れます

7) 日 程

● 9：00 受付（2号館1階エントランス）

● 9：30～10：00 開会式・総会（会場 M2605 教室）

1. 開会のことば
2. 会長あいさつ 横田 恭三（跡見学園女子大学）
3. 理事長あいさつ 永由 徳夫（群馬大学）
* 議長選出 [] ()
4. 議事
 - 1) 令和4年度事業報告 杉山 勇人（鎌倉女子大学）
 - 2) 令和4年度決算報告 尾川 明徳（筑波大学）
 - 3) 令和4年度監査報告 山口 恭子（法政大学）
 - 4) 令和5年度事業計画（案） 杉山 勇人（鎌倉女子大学）
 - 5) 令和5年度予算（案） 尾川 明徳（筑波大学）
 - 6) 局体制の再編に伴う規約改定について 永由 徳夫（群馬大学）
 - 7) その他
5. その他
 - 1) 学会誌について 角田 勝久（新潟大学）
 - 2) 学会創立65周年記念 台湾研修旅行について 下田 章平（相模女子大学）
 - 3) 新入会員紹介
 - 4) 次年度開催大学あいさつ [] ()

●10:10 ~ 11:50 研究発表／午前の部 (会場 M2605 教室)

10:10~10:40 研究発表① 司会: 尾川 明穂 (筑波大学)

「漢委奴国王」の解読における通説の「奴」の誤解と真実

元 青山学院高等部 非常勤講師 佐藤 法雄

10:45~11:15 研究発表② 司会: 下田 章平 (相模女子大学)

柳公権「心正則筆正」論の展開—術語のもつ意味の変容をめぐる—

二松学舎大学 専任講師 関 俊史

11:20~11:50 研究発表③ 司会: 草津 祐介 (東京学芸大学)

工藤文哉による「朝鮮書道史」研究とその意義

国立ハンセン病資料館 主任学芸員 金 貴粉

●11:50 ~ 12:50 休憩 (60分)

●12:50 ~ 14:30 研究発表／午後の部 (会場 M2605 教室)

12:50~13:20 研究発表④ 司会: 萱 のり子 (奈良教育大学)

筆管の回転を基軸とした書道史記述の可能性について

筑波大学 准教授 尾川 明穂

13:25~13:55 研究発表⑤ 司会: 小川 博章 (淑徳大学)

大西見山の交友関係に関する一考察

相模女子大学 准教授 下田 章平

14:00~14:30 研究発表⑥ 司会: 角田 勝久 (新潟大学)

漢字本来の意味を探る—文字字源を探求するための民俗学的方法—

大阪教育大学 教授 出野 文莉 (張莉)

●14:30 ~ 14:40 休憩 (10分)

●14:40 ~ 16:00 学会創立 65 周年記念特別講演 (会場 M2605 教室)

司会: 萱 のり子 (奈良教育大学)

演題: 「王羲之 的研究中に突き当たった問題とその思考」

(原題: 王羲之 的研究中偶発的問題及其思考 なお、発表は日本語で行われます。)

講師: 祁小春 先生

—き しょうしゅん

中国人民大学芸術学院教授

中国書法家協会理事兼學術委員会副主任

教育部高等学校書法類考試招生指導委員会副主任

●16:10 閉 会 閉会のことば 副理事長 小川 博章 (淑徳大学)

8) 学会誌への投稿

- ・研究発表後に、学会誌へ投稿される場合には、連絡先を明記した別紙とともに、完成原稿（3部）を11月10日（金）までに学術局長宛に送付してください。
- ・大会における研究発表を経ずに、学会誌に研究論文を投稿される際は、1次要項にならった体裁の論文要旨を8月31日（木）までに事務局長宛に送付・お申込みください。学術委員会の審議を経て、投稿の可否を連絡いたします。その上で、学会誌または学会ホームページ掲載の執筆要項を確認の上、完成原稿（3部）を11月10日（金）までに学術局長宛に送付してください。

(学術局) 〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050 新潟大学教育学部
全国大学書道学会学術局長 角田 勝久 宛 (025-269-9250)
(tsunoda@ed.niigata-u.ac.jp)

9) 会員書作展

会員作品展を以下のように開催いたします。ふるってご参観ください。

- (1) 会 期 令和5年9月13日(水)～9月20日(水) 9:00～20:00 (土日祝日は9:00～17:00)
(初日は13:00から、最終日は12:00まで)
- (2) 会 場 文京区立大塚地域活動センター
住所 東京都文京区大塚1-4-1 (中央大学茗荷谷キャンパス内2階)
TEL 03-3947-2624

- (3) 展覧会テーマ「全国大学書道学会会員による現代書芸術の探求展」(文京区による地域大学との連携企画)
ギャラリートーク 9月13日(水) 19:00～20:00
※同会場で、横田恭三先生によるギャラリートークが開催されます。

10) 理事会【オンライン開催】

日 時 9月10日(日) 19:00～20:30 ※理事の皆様には別途ご連絡いたします。

11) 三学会合同懇親会 ※本年度は実施いたしません。

12) 大会会場への交通・宿泊・昼食について

〈交通〉東京メトロ丸の内線「茗荷谷駅」(出口2)より徒歩約2分
東京メトロ有楽町線「護国寺駅」(出口5)より徒歩約8分
〈宿泊・昼食〉各自ご手配願います。

13) 緊急時における対応について

緊急時(感染拡大・災害等)は、開催校との協議により大会を中止することがあります。その場合は、開催日前日の19:00までに全国大学書道学会ホームページ(<http://all-shodo.jp/>)にてお知らせいたします。ご確認をお願いします。

[お問合せ] ・研究発表、学会に関するお問い合わせ

全国大学書道学会事務局(杉山勇人/鎌倉女子大学/sgym-hyt@kamakura-u.ac.jp/0467-33-8211)

・大会に関するお問い合わせ

開催大学担当(横田恭三/跡見学園女子大学/yokota@atomi.ac.jp/048-478-3413【文学部研究室】)

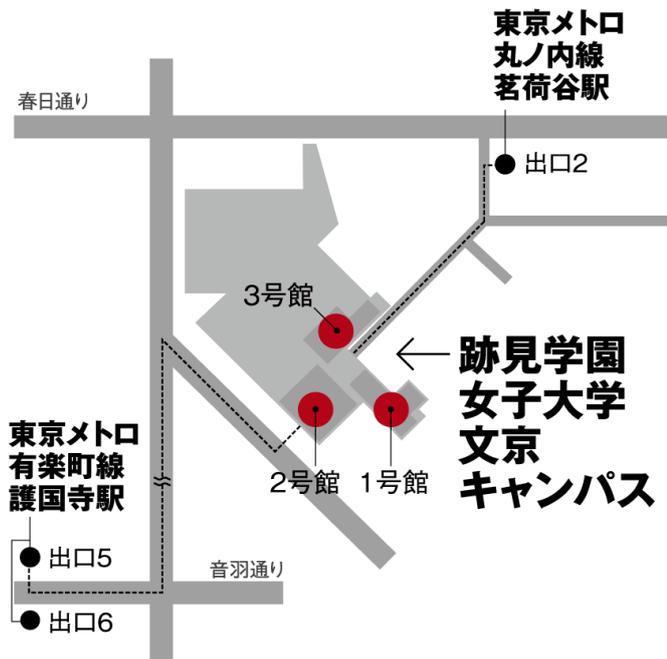
本学会と併せて、下記の学会等が開催されます。(参加費はそれぞれに必要です)

*9月15日(金) 13:00～16:50 日本教育大学協会全国書道教育部門

*9月16日(土) 9:30～16:10 全国大学書写書道教育学会

アクセスマップ

【大会：跡見学園女子大学（文京キャンパス）】



- ◇東京メトロ丸の内線「茗荷谷駅」(出口2)より徒歩約2分
- ◇東京メトロ有楽町線「護国寺駅」(出口5)より徒歩約8分

【会員書作展：文京区立大塚地域活動センター】



- ◇茗荷谷駅・大会会場から徒歩2分(中央大学茗荷谷キャンパス内2階)
- ◇所在地：〒112-0012 文京区大塚1丁目4番1号
- ◇電話：03-3947-2624

令和五年度 全国大学書道学会（東京）大会

研究発表要旨集

令和五年九月一七日（日） 於…跡見学園女子大学

「漢委奴国王」の解説における通説の「奴」の誤解と真実

元 青山学院高等部非常勤講師 佐藤 法雄

「漢委奴国王」の金印の読み方は通説となっている「カンノワノナノコクオウ」と、それとは別に「カンノイトコクオウ」と読む説もあることは周知の通りである。二〇〇二年その読み方について久米雅雄氏が「カンノイトコクオウ」と読むべきだと論じたのに対して、その後小林斗盞氏は久米氏が引用した石川九楊氏の文章の信用性と久米氏の中国の印制の認識について批判し、通説通りに読むべきだと反論した。その後「カンノイトコクオウ」と読んでいた石川氏は小林氏の言及の影響を受けたのか、公共放送を通じて「カンノワノナノコクオウ」と読むのが正しいと自説を撤回したことで世間一般では一見落着いたかに思われた。

しかし、両説ともに根本的などころで大きな誤解をし、先の論争自体が本質的に意味をなさないことが見落とされてきた。それは両説ともに漢廷が名付けた「漢委奴国王」の印文の「奴」または「委奴」を三世紀ごろの日本固有の地名である「奴(ナ)」や「伊都(イト)」に解釈上帰着するという過ちをしている事である。「委奴」の名称と「奴(ナ)」「伊都(イト)」の名称とは全く無関係であり、両説ともに読み方に加えて解釈においても二重に誤っているのである。

この極めて貴重な金石資料を誤解したまま後世に伝えてはならず、難解ではあるが印文の「奴」を中心に真相を解き明かして正しい解説に近づける未来へつなげたい。

柳公権「心正則筆正」論の展開

— 術語のもつ意味の変容をめぐって —
二松学舎大学専任講師 関 俊史

書は人なり。これは現在のわが国において、書を語る象徴的な語としてしばしば取り上げられる。これは、表象された書がその人となりを表現しているという言説である。たとえば、美しい文字を書く人は、その心持ちや人柄も美しいというものであり、表現された書とその人物に相関性を見いだすものである。しかし、なぜ殊更に書と人物を接続して語るようになったのか。これが本研究の起点である。

表現者の内面性と、その現われとしての書ということについては、中国書論では早くより「手」と「心」の問題として扱われてきた。ただ、そうした表現者の内面性と技巧をめぐる言説で、もともと影響力を持ち、膾炙している語は、本報告で取り扱う「心正則筆正」論であろう。

このテーゼは、柳公権(七七八—八六五)が発したものである。彼は、顔真卿の書法を継承した「玄秘塔碑」などで知られ、書に巧みであったことはよく知られている。官吏としては、穆宗から懿宗の六代の皇帝に仕えた。このうち、穆宗との応答で出されたのが「心正則筆正」論である。

本報告では、この「心正則筆正」論をめぐって、柳公権の発言がどのよう位置づけられていたか、どのように意味づけが変容してきたかを追い、その背景にある思想を明らかにすることで、書と人が接続されるに至った経緯の一端を明らかにしたい。

工藤文哉による「朝鮮書道史」研究とその意義

国立ハンセン病資料館主任学芸員 金 貴粉

一九三〇年、日本では初めての書の全集である『書道全集』（平凡社）の配本が始まり、一九三二年五月までの間、全二七冊が順次刊行された。

この『書道全集』二四巻には、野本白雲「支那書道史」、工藤文哉（壮平）「朝鮮書道史」、尾上紫舟「和様書道史」の三篇が所収されており、「朝鮮書道史」を著した工藤は当時、朝鮮総督府官僚兼書家として活動していた。工藤は、官僚としての職務の合間をぬい、一九一九年に『心無罪 礙棲鶏林書存』という朝鮮書跡集の刊行も行っている。

戦前の日本人による朝鮮書道に関する刊行物として最も有名なものに比田井天来によって一九三一年に刊行された『朝鮮書道菁華』があり、報告者は先行研究（金 二〇二一年）において、比田井天来が数回にわたって朝鮮踏査を行い、書家の金敦熙、斎藤実朝鮮総督等の協力によって完成に至った経緯について明らかにした。しかし、比田井天来は工藤と異なり、長く朝鮮に居住したわけではなかった。朝鮮総督府官僚としての立場で、日常業務を行いながらも書家としての一面をもっていた工藤は、朝鮮の書についても関心を向けていたのである。

果たして工藤がどのように朝鮮書道への理解を進め、「朝鮮書道史」を著すこととなったのか。本発表ではその背景について考察するとともに、工藤による「朝鮮書道史」研究とその研究史的意義を明らかにすることを目的とする。

筆管の回転を基軸とした書道史記述の可能性について

筑波大学准教授 尾川 明徳

発表者は、「手指運動解析による書道史研究の試み―筆管の回転を基調とする運筆の想定を通じて―」（『大学書道研究』第十六号、二〇二二）において、特定の執筆法・運筆により被験者が名跡を原寸臨書した結果、その書法上の特徴が再現しやすいくことを確認した。しかし、このときの対象は王羲之「蘭亭序」神龍半印本（北京・故宫博物院蔵）、褚遂良「雁塔聖教序」、顔真卿「顔氏家廟碑」の三件に限られており、複数時代の書跡を扱った包括的な検討が必要である。

本発表では、高等学校教科書や概説書に掲載される名跡のうち、特徴的な形状の筆線を有するものに注目し、筆管の回転を基軸とした書道史記述の可能性を探りたい。この回転については、上掲拙稿において王羲之「十七帖」に言及した際、時計回りを繰返して実線を引いた可能性を指摘した。これは、紙が平滑でなく筆毫も不均質であったことが理由とも考えられ、以降の王書や、孫過庭「書譜」（台北・国立故宫博物院蔵）ほか王羲之系統とされる名跡においては時計回り・反時計回りを交互に用いた可能性も想定される。これ以外の数件も合わせて発表者が試書を行い、モーシヨンキヤプチャで手指の位置を計測することで考察したい。

なお、筆管の回転の大きさを規定するものに、手指や筆管の太さと、文字の大きさ（字径）が想定される。これらも副次的ながら重要な要素として考慮していきたい。

大西見山の交友関係に関する一考察

相模女子大学准教授 下田 章平

本発表は近代書画碑帖收藏史研究の一環として行うものである。当該期の收藏史を体系的に理解するために、稿者は明治時代から現代までを暫定的に五期に区分した。本発表では、ボストン美術館の中国絵画コレクションや日本の関西を中心とする中国書画碑帖コレクションといった一大コレクションが形成され、中国書画碑帖の收藏史上の劃期をなす第二期（辛亥革命から第二次世界大戦終了時）において活動した大西見山（一八七〇—一九三〇）を取り上げる。

当時の收藏界の中心人物の一人であった文求堂主人・田中慶太郎によると、日本の碑帖收藏家として中村不折、三井高堅、大西見山を挙げている。前二者の一次資料はあまり公開されていないが、大西見山に関しては膨大な書簡を中心とする資料群が存在する。また、これらの資料群は、明治末年から昭和初期までを網羅しており、通時的に分析することが可能である。前稿「大西見山の收藏活動と日本への碑帖流入の実態」〔全国大学書道学会〕第一六号、二〇二二〕では、大西見山コレクションの特徴や大西見山の收藏事蹟の考察によって、日本に流入した碑帖の流入過程について検討した。本発表では、前稿で課題とした、大西見山の收藏をとりまく広汎な交友関係を中心に検討したい。このことにより、単に大西見山の書画碑帖收藏ネットワークが明らかになるだけでなく、第二期における書画碑帖の日本への複層的な流入経路が明らかとなるだろう。

漢字本来の意味を探る

—文字字源を探索するための民俗学的方法—
大阪教育大学教授 出野 文莉(張莉)

書道は表現芸術である。特に漢字書道は書かれてある漢字の意味を感性的に伝えようとする。言葉に言葉があるように、漢字にも霊が宿っている。それらが紙面から滲み出るように表現された書は見るものをして感嘆せしめるに違いない。字の原初的な意味を念頭に置いて筆文字を書く、表現能力に微妙な差が現れることを想定されたい。そのための漢字の基礎的知識について考察したいと考える。

白川静氏によると、文字の最小の形態素、例えば、「文(甲骨文…𠄎)」「爽」「爾」「凶」「彦(彦)」などに見る「×」は邪悪なものが入ってこないようにするための記号である。これらの文字には民俗としての「×」の意味が貫通している。このような漢字に見られる象徴的な記号の特性は漢字の原初的で民俗的な内容を如実に表している。

筆者は二〇一二年、中国の西双版納の少数民族部落を訪れた。その時に見た哈尼(ハニ)族の村門には左右に鳥の木彫が飾られてあり、それが日本の神社にある鳥居の原型であった。彼らの住居は高床式で家々の屋根には千木が飾られていて、また、伊勢神宮の建物に見るような鯉木が飾られていた建物もあった。「学」「教」の古い字形には千木のある建物を示している。各々の漢字が出来た時に、漢字の字形にはその当時の民俗が反映されている。中国の古代文字の興った原意をより正確に知るために白川静氏の民俗学的方法の検討を行いたい。